

**スポーツ映画に描かれる「今」  
～日本アカデミー賞受賞作を通して見る日本社会～  
Modern society as portrayed in sport movies:  
Japanese society viewed from Japan Academy Award-winning movies**

1K06B177

指導教員 主査 リートンプソン先生

濱崎 慎也

副査 宮内孝知先生

**【序章】**

スポーツと接する時に私たち現代人はスポーツ自体と生で接することは少なく、メディアを通じて接することが多い。その中で映画にスポーツを当てる。日本と海外の映画を比較すると日本のスポーツ映画の数は少ない。また海外はスポーツを通じて黒人問題を代表とする対立の克服を描いているのに対し、日本にはそのようなことは描かれることは少ない傾向にある。日本ではいわゆる王道のスポーツとは言えないスポーツが題材となり評価を得ている。他のメディアと映画というメディアの違いを意識しながら、日本においてスポーツを題材とする映画には何を描くことが求められているのか、またなぜスポーツを題材とするスポーツが少ないのかを考え映画というメディアについて考察していきたい。

**【第1章】スポーツ映画は求められているのか**

第1章ではスポーツ映画の現代社会で位置づけについてまとめた。映画業界の動向を調べると映画という産業自体が消費が細分化する中で減退していた。スポーツ映画を「スポーツを主題として描いている映画」と定義し近年の映画全体の中での位置づけを調査したところ年間興行収入が10億円を超えた作品が2000年以降に7作品ありこれはスポーツ映画は日本において求められていないのではないという結論に達した。日本のスポーツ映画の中で日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞している映画は3作品あ

り、その時代に映画業界と一般大衆の双方が求めているものの最大公約数を知ることのできる材料であることを明らかにした。

**【第2章】バブルと伝統スポーツの衝突を描いた『シコふんじゃった。』(1992)**

1992年の受賞作である『シコふんじゃった。』の内容分析、社会背景調査を行った。バブル景気の真ただ中であつた日本人は楽をして生きようとする傾向にあつた。特に当時の大学生は進化した「クリスタル族」でありスポーツを出来事と捉えいわゆるスポ根を嫌う傾向にあつた。相撲は伝統スポーツであり努力や我慢を必要とするスポーツの代表であり、その2つの異文化の交流により大学生が成長していく姿を描くことで、当時の人びとの願望を描き出していた。

**【第3章】おじさんの頑張りを描く『Shall We ダンス?』(1996)**

1996年の受賞作である『Shall We ダンス?』の内容分析、社会背景調査を行った。バブルが崩壊し停滞の時代を迎えた日本でその代表として主人公が中年男性に変化した。当時スポーツに対する人びとの姿勢の変化が見られ「健康のためのスポーツ」という大義名分が生まれていた。しかしこの作品はそれに警笛を鳴らしスポーツに大義名分などいらないことを示した。周囲の評価を気にするのではなく、自分から何かに動き出すことが求められた停滞の時代にスポ

ーツへの参加を題材にそれを描き出した作品であった。

【第4章】 懐古主義に走る「フラガール」(2006)

2006年の受賞作である『フラガール』の内容分析、社会背景調査を行った。続く経済不況の中で現代に自信が持てない日本人は保守化が進み懐古主義が流行した。またスポーツによる地域活性化は近年注目される分野であるが成功例が少ない。そこで昭和を舞台としたこの作品が過去からの教科書として評価されることになった。

【終章】 スポーツ映画のこれから

三作品は現代社会とそのニーズを把握し反映させた物語を描いたことで評価を受けていた。これからもそれを望みたいが、細分化・個人化した多様なメディア選択肢が存在する近年、映画はテレビや漫画といった他のメディアに頼る傾向が強く、このままでは映画というメディアの存在意義が薄れてしまうのではないだろうか。そうならないことを願ってやまない。